マスター・ブラッド

神代 耕也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マスター・ブラッド

【Nコード】

N8528I

【作者名】

神代 耕也

【あらすじ】

二人の「渡り鳥」、ルーギ・ブラッドとフィオナ・バレンタイン。旅する彼らが様々な事件に巻き込まれ、解決していくことによって成長していく。

プロローグ

かつて「霸王」と呼ばれた者がいた。

吸血鬼であった霸王は9人の弟たちと共に、すべてをその手中に収めたと言われている。

その圧倒的な暴力は神として崇められ、彼の血族を「神祖」と呼び、吸血鬼の中でも特別扱いされた。特別扱いされるだけあり、その弟たちも圧倒的な強さを誇っていた。

また、吸血鬼に寿命はない。そのため、霸王は2000年ほど君臨し、世界の行政を担ったとされる。方法等は残っていないが石版によると、かなりの名君であり、まさに霸王の名にふさわしかった。

彼のほかにも吸血鬼はいた。それらは「王祖」と呼ばれている。

それは霸王により認められたもののみが名乗ることが許されたこと、各地方の支配を許されていた。現在も十数人生き残っており、人間の脅威になっている者もいる。

それ以外は人間たちには「始祖」と分類されている。始祖の洗礼を受けた者たちは「使徒」と呼ばれ、これぐらいになると太陽光に耐えず、人間にとって水銀が毒であるように、銀が毒となる体質である。

話がそれた。吸血鬼の霸王。彼は2000年もの間世界を支配した。しかし、それも一万年程前のことだ。そのときに霸王のみならず神祖の大半がきえたとされている。不老不死にして至高たる存在の彼らが消えたのか、現在のところ解明されていない。

ただひとついえる事は、その後の世界は混乱に包まれた。そして吸血鬼の支配する国、人間の支配する国など様々な国ができた。前者が有効な国もあればそうでない国もある。世界はまさに一本の針の上に立つお盆のようであるが、一応安定に向かっている。

これらを考古学的に「一万年戦争」と呼ばれ、現在も続いている。

この物語は、二人の「渡り鳥」を主人公としている。様々な国で、様々な事柄にかかわりあう二人であるが、そのすべてがつながっていることはまだ二人とも知らなかった・・・

プロローグ（後書き）

これが私の処女作です。小説（活字）が苦手で、絶対下手だと思いますが、一生懸命がんばります。いろいろな批評をしてください。ただ、いいところがあれば褒めてもください。よろしくお願いします。

暁に染まる城く不穏な街1

あまり舗装されていない道を二人の男女が歩いている。

男のほうは二十代前半だろうか・・・とても奇妙な格好をしている。今は太陽が真上にある時間帯。気候も真夏ではないとはいえ、森の木々もまだ紅葉の気配なく、緑が生い茂っている。それなのに、真冬かのごとく黒いロングコートを羽織っている。黒い紳士帽をかぶり、黒ぶちメガネに肩まであるだろう黒い髪の毛を後ろに束ねている。その尻尾のように束ねられた髪が歩くたびにピョコ、ピョコとコートに襟から出たり入ったりしている。

一方、隣の少女は彼よりもだいぶ若く見える。16・・・いや、15歳にはなっていないだろう。金色に輝く髪をポニーテールにしており、歩くたびにそれが太陽光を反射してキラキラ光っているようにさえ見える。短パンの上から巻かれたホルスターには二丁の拳銃がさされてあり、それも少女が使うにはあまりにも大きなものだ。また、特徴的な短パンのため、白い素足に時折傷の跡が見て取れる。その姿が彼女のワイルドさを引き立てていた。

「ルーギ、次の街って後どれくらい？お昼ごろには着くって言うってたわよね・・・ねえ！聞いているの？ルーギってば」

少女はルーギと呼んだ青年の顔を覗き込む。黒い帽子とコートの襟の影せいで、彼の顔は彼女のほうからはほとんど見えなかった。そのため、彼女は下から覗き込むような格好になる。ルーギは下を向いたまま返事をしないが、その足取りはとても軽やかだった。

「ルーギ！」

「・・・」

「・・・ルーギ・・・」

「……」

「……ルウ（ギ）……」

「……グウ……」

「起きんかコラー……!!!」

ドゴツと地響きが起こるような音と共に周りにいた鳥たちがいつせいに飛び立っていく。

次の瞬間、顔を地面にめり込んだルーギの姿がそこにあった。

「ひはいらなれふあ。いおがいもりよふねれいふあるり（痛いじゃないですか。人が気持ちよく寝ていたのに）」

地面に顔をうずめたままではしゃべるルーギは何を言っているのか理解不能……と思われた。しかし、少女にはちゃんと通じていたようである。

「歩きながら寝るなんて……器用といつかなんとというか……で、次の街までどのくらい？」

ルーギは顔をめり込ませたままそくさとコートの内ポケットに手を入れる。一枚の紙切れを取り出した。

「よく読めないんだけど……その地図」

地図に書かれてある言葉は彼女には理解できない言語だった。

「これクルメニア語じゃない？私読めないわ」

クルメニアとは彼らが現在いる国であり、独特の文字を持つ国である。他国とのつながりが多いため大抵の言葉は通じるが、文字を読める人間はこの国の人間以外ではよほど文学に精通している人間しかない。

地面にめり込んだ顔を上げ、あごを地面につけたままルーギは地図を見つめた。その後、近くにあった（といっても30メートルほど離れていたが）看板を目を細めて見つめた。

「あ！ここがわかりました」

「『ここがわかった』って……なんか微妙なのが聞こえたけど、まあいいわ。で、後どれくらい？」

「ここから1キロほど戻ったあたりを右に行って500メートル当

たりにあります」

「え？1キロ戻るって？」

「寝てましたからね。いや、寝過ぎました……フィオナ！やめなさい！銃はあたると痛い所ではな……」

ルーギがすべて言う前に銃声が当たりに響いた。幸いなことに周りには誰もいない。フィオナは誰かに当たることを気にせず銃が撃てると思った。もっとも、ルーギにとっては全く幸いではなかったが……

銃声が響いた1時間後。二人はようやく町に着いた。予定より30分ぐらいの遅れですむということでルーギはフィオナからようやく許してもらった。説得に30分かかったが……

「旅費も大分無くなってきました。この町である程度稼がないと次の町まで持つかどうかわかりませんよ」

「そんなこと気にしてる場合？見なさいよ」

フィオナは街に指を刺す。そこには人が一人も見当たらない。家のいくつかは窓ガラスが割れており、まるでつい先ほどまで戦場だったかのような光景、正しく廃墟だった。

「人がいないと稼げないわよ。ねえ、本当に地図ではここが街になつてるの」

「ええ、といつてもこの地図は20年前のものですからね。その間に何かあったのかもしれませんが」

20年前え！？とフィオナは驚きの声を上げたが、実際のところはそんなに驚くことではない。

小国の多々あるこの地方ではいつ戦争が起きるかわからない。以外に見落としがちだが、戦場において「地理」というものはその国を制するにおいて最も重要なことを示す。戦略をより有利に進められるだけでなく、その土地の価値さえもわかってしまうからだ。よって、地図というものはあまり信用できないのだ。

「大丈夫ですよ。ほら」

ルーギは目の前に見える街の中でもっとも大きな屋敷に向かって指す。彼が指差して方向にはシーツが干されていた。

「最低でもあそこに誰かいますよ。いつてみましょう」

ルーギがそういうと二人は町の奥の一番大きな屋敷に向かって歩き出した。

この街には人の気配がまったく感じられない。しかし、人がいた気配は感じられた。そのことはこの大きな屋敷についても同じ。しかし、この屋敷にはシーツが干されてある。そのこと以外この街に人がいること示すものがなかった。

ルーギは扉の前でなにやら不穏な気配を感じた。殺気というよりは、何か違う、そう、猫に追い詰められたねずみが発するもののように感じた。

「どうしたの？」

フィオナがルーギに問いかける。

「いえ、何かこう、いやな感じがしませんか？」

「なにいつてるの？こんな廃墟みたいな街じゃいい感じがするわけではないじゃない。とつとといくわよ」

そういいながらフィオナは勢いよく扉を開けた。その瞬間だった。

鍬、鉋、鎌、鋸などの耕具を30人ほどの男に突きつけられ、思わず黙り込んでしまう。

「お前ら！　いったいどこから来た。何しに来た。あいつの回し者か！」

フィオナは目を丸くしていたが、しばらくしてため息をつくとルーギのほうを振り返った。

「この場合どうしたらいいと思う？」

その言葉には余裕が感じられる。一番前にいた男が「馬鹿にしているのか！」と大声を出したがフィオナは無視していた。

「一番・・・というか普通は素直に従うんじゃないですか？」

ルーギのほうも大してあせっている様子はない。

「もしくは・・・」

「もしくは？」

フィオナがうれしそうに尋ね返す。彼女の中では彼が何を言うかはわかっていた。

「戦力的に乏しければ・・・戦闘不能に追い込むのも手ですね」

ルーギのせりふがいい終わるのとはほぼ同時に多数の銃声がこだました。

全員が固まるしかなかった。銃声が鳴っていた1、2秒の間に前に立っていた6人の鎧などが全て破壊されていたからだ。男たちが前方を見るとフィオナが両手に拳銃を持ちくると回している。その表情からは明らかに余裕が感じられた。そして最も恐ろしかったのは耕具が6つ破壊されたこと。わずか1、2秒の間に6発の弾丸を放ち全て命中させたという事実がその場にいた男たち震え上げさせたのだ。

「次は当てるわよ。どうするの？」

フィオナの小さな微笑は周りの大人たちを震え上げさせた。わずか15歳にも満たない少女が・・・

「フィオナ。そのくらいでいいでしょう？ 私たちは怪しいものではありません。旅をしている・・・『渡り鳥』なんです。どうか警戒を解いていただけませんか？」

かぶっていた紳士帽を脱ぎ、会釈をしながらルーギはその場の收拾を図ろうとしていた。すると男たちの後ろのほうから明らかに風貌が違う。とても威圧感のある男が現れた。

「すまない。いろいろあって・・・とりあえず上がってくれないか？」

その場にいた全員がその男に釘付けになる。フィオナはその男に向かって銃を突きつけた

「こんな雑魚でも私たちは一応命を狙われたんだけど・・・」すま

ない』の一言で終わりなの？」

「フィオナ！いい加減にしなさい！」

ルーギの言葉に渋々銃をホルスターにしまう。ルーギはそのまま男の方を見つめた。

「なぜこのようなことをしたのか・・・事情を説明していただけませんか？」

「わかった。ひとまず上がってくれ。私は町長を勤めているロナルド・ベルーシ」

ロナルドは胸に手を当てて少しだけ頭を下げた。

「私の名前はルーギ・ブラッドといいます。そして・・・」

「フィオナ・バレンタインよ」

深々とお辞儀をするルーギをよそにフィオナはロナルドに目さえあわせなかった。

暁に染まる城〜不穏な街1〜（後書き）

私はこういうことすら初めてで、それどころかパソコンすらうまく使えません。なので温かい目で見てください。

暁に染まる城く不穏な街々

彼らが案内された部屋はりっぱな外見とは裏腹にカビ臭ささえ感じらるるところだった。二人は食卓用のテーブルに座ったが、ルーギはあまりのカビ臭さに思わず鼻を押さえる。コートを脱がず、帽子はかける所があったが、においがつくのを気にして、ひざの上に置く。フィオナは彼と違い、においなどをあまり気にしない。ルーギの行動を見つめつつ彼の隣に座り、右手に持った拳銃をくるくる回してた。

並んで座った二人を見て、ロナルドは二人の關係に多少の違和感を感じていた。渡り鳥が二人組であること自体珍しくない。しかしこの組み合わせは珍しい。拳銃を自在に操る14歳程度の少女と全身黒い服を着た20歳過ぎの青年。少女のほうは武器が耕具とはいえ三十人の大人たちをも押さえつける実力を持っている。しかし、素性・年齢など關係ない。ロナルドは力がどうしても必要だった。彼自身の目的のために……。

「すまない事をした。君たちは渡り鳥なんだそうだね？」

「そうよ。それにしてもこの騒ぎは何よ、なんかあったの？」

少量の怒りと好奇心を込めてフィオナは言った。その言葉にロナルドは下を向いて頭を抱えた。その顔はフィオナからよく見えなかったが、とても暗くなっていることは分かった。

「この街をどう思いますか？」

いきなりこのようなことを聞かれてフィオナは戸惑いを隠せない。ルーギは机に肘をつき、人差し指でこめかみを押さえながら話を聞いていた。

「人氣がほとんど感じられないわ。台風なんてもんじゃなく、そこそ家が壊れてないだけで竜巻が通ったみたい……それがどうしたの？」

「この街から10キロ離れた場所に・・・バナンの城があるんだ・・・
吸血鬼『始祖』シユナン・ドル・バナン」

ロナルドの瞳は虚空を見つめていた。そして真剣な顔でフィオナを見つめた。

「シユナンはこの地方を支配している吸血鬼だ。その实力は『王祖』に匹敵するとさえいわれている。そして数々の『使徒』を生み出しここ一体を支配している」

「その吸血鬼がこの町に何かしたの？」

フィオナの目が輝き始める。その瞳には好奇心があふれ出ていた。

「何かしたって！そんなものではない！この街から子供、女たち……すべてを奪っていったんだぞ！」

その好奇心が目に見えたのだろう。今までにない怒りを込めてはなつたロナルドの剣幕にフィオナは思わず押し黙ってしまった。

「この街がこうなってしまったのはあの忌まわしき吸血鬼のせい・・・いや、もういい、詳しく話す必要もないだろう。すぐに本題に入る。我々は『渡り鳥』達、その中でも戦闘能力に特化した者たちを集め、討伐隊を組織したいと考えている。いや、もう組織しているしかし、人数は多いほうがいい。さきほどの銃の腕、買おうと思う。私たちの討伐隊に加わってくれんか？報酬は弾む」

フィオナはそれを聞いて返答しようとした時、先にルーギが口を開いた。

「討伐する吸血鬼・・・始祖と言っていましたね。使徒は何人ですか？」

吸血鬼の始祖はその名の通り始まりの吸血鬼であり、使徒はその吸血鬼によって吸血鬼にされた人間である。使徒は始祖に忠誠を誓っているものがほとんどであり、つまり手下となる。もちろん、普通の人間では太刀打ちできないほどの戦闘能力を持っている。しかし、始祖にとって使徒を作ることとはそれなりのリスクを伴うことにもなる。

「始祖は使徒を作ることによってその能力を受け渡します。もちろん

ん、『数』という点で使徒が多いと問題がありますが、少ないと始祖自身の能力が高いということですよ」

「使徒は6人確認しています」
「少ないですねとルーギが答えた。彼は両肘をテーブルにつき、顎を手に乗せ考え込んでいる。」

しばしの沈黙が流れた。この緊張感耐えきれずフィオナがルーギの耳元にボソボソと話しかけた。

「何考えてるの？困ってるんだから助けてあげればいいじゃない、あんたららしくない」

「そんなに単純だと思ってるようなら、あなたは落第点ですよ」
ボソツというルーギの余裕ある言葉に多少ムカツときたが、フィオナは同時にその言葉の意味を考えていた。しかし、彼女は困っている人間を無視できるような性格ではないため、この時すでに自分はこの依頼を受けることを決めていた。それに吸血鬼の始祖と戦うことができないのだ、彼女にとって断る理由はない。

問題はルーギのほうだ。

「今、その討伐隊は何人集まっているんですか？」

「4人、私を含め5人」

「あなたも参加するんですか？」

「こう見えて元軍人だ。足手まといにはならんさ」

「私たち含め6人・・・使徒と同じ人数・・・わかりました」

「それでは！」

「お断りします」

ルーギの意外な発言にロナルドは思わず「え？」と聞き返してしまふ。それよりも驚いたのはフィオナだった。

「なんで断るの！？そんな理由ないじゃない!？」

「使徒を一对一で戦って、それも勝ってそのあと始祖と戦えって言ふんですか？少々無茶があります」

「あなたがそれを・・・」

フィオナが言いかけたところでルーギは彼女の唇に二本の指を当て

る。というより押さえつけた。

「ともかく私は断ります」

しばしの沈黙が流れる。ロナルド自身断られると思っただけで、その瞳に驚きと焦り、そしてかすかな怒りが感じられた。

「・・・わかりました。それでは・・・」

「待って！」

話を切ろうとしたロナルドにフィオナが割って入る。

「私は受けるわ、断る理由がないもの。ルーギ、それでいいでしょ。ルーギは顔をしかめながらボリボリと乱しながら髪をかく。

「あなたの自由にしてください。私はすることがあるので手伝えませんよ」

フィオナの顔に笑みが浮かぶ。そして、ロナルドの顔にも・・・。ルーギは席を立ち部屋を出ようとすると、ポンとフィオナの肩に手を置き、耳元で小さくつぶやいた。

「気を付けてください。仕事だけではありません。全てにおいて・・・です」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8528i/>

マスター・ブラッド

2010年11月14日01時54分発行